

## チュニジア「ラシディーヤ」伝統音楽研究所

—歴史と現在

松田 嘉子

はじめに

チュニジアは北アフリカのいわゆるマグリブ諸国の一つだが、地中海沿岸にあって文化的にはアラブ、ヨーロッパ、アフリカの要素が融合している。音楽はアラブ音楽の一派をなし、モロッコやアルジェリアと共通したアンダルス音楽を源流に持つが、エジプトやトルコの音楽からの影響も強く、豊かで興味深い音楽

伝統を有している。

一九三四年、チュニスに創設された「ラシディーヤ」伝統音楽研究所 Institut Rachidia de la musique tunisienne は、チュニジア初の音楽教育研究機関であり、アラブ圏でもっとも古いものの一つである。創設の目的は、チュニジア音楽の伝統を守りそれを活性化するだけでなく、新しいチュニジア音楽を創造し、質の高い演奏で継承発展させることであった。

本稿では、チュニジア音楽の位置付けと特徴を踏まえた上で、ラシディーヤ研究所設立の背景から、ラシディーヤに関わった主要な音楽家たちの功績や作品を含めて、ラシディーヤがチュニジア音楽に果たした役割を論考したい。また八十年に及ぶその歴史のうちには様々な出来事があったが、二〇一一年のいわゆるジャスミン革命以来大きな変動期にあるのも事実であり、その状況についても考察する<sup>1)</sup>。

## 1. アラブ音楽の中のチュニジア音楽

## 1-1. ニつのアラブ音楽伝統、マルーフとシャルキー

チュニジア音楽は、アラブ音楽のマグリブ（西方）楽派に属し、アンダルス音楽の系譜に連なる。アンダルス音楽はアラブ・アンダルス音楽ともいい、アラブ・イスラム教徒がイベリア半島（アラビア語でアンダ